

大きな出来事、  
小さな出来事

周作が三階の教室から降りて行くと、二階との間の踊り場にただならぬ空気のあるのを感じた。果して、ドタ靴の鋭くすれる音や肉體の相搏つ鈍い音がしてきた。

「喧嘩だな」と思つた。教師生活を一年もしてゐると、遠くからでも、普通でない空気は直ぐと察することができる。まして、周作はすでに五年の生活をしてゐる。

喧嘩を取圍んで傍觀してゐた十人近くの生徒は、彼が靜かに後に立つたのに氣付くと道をあけたり逃げ腰になつたりした。こんな場合、「來たぞ！」と教師の來たことを喧嘩の當事者や他の傍觀者に知らせて、喧嘩相手諸共、蜘蛛の子の散るやうに逃げ去るものだが、彼の現れ方が餘りに靜かであり、靜けさの中に無氣味なものがこもつてゐるので、彼等は知らせることの自由も逃げることの餘裕も失つて、凝然として了つた。その一種凍りついたやうな周圍の中

に、まるで教師の來たことに氣づかずに泥まみれになつてたたき合ひ擲り合ひ蹴合つてゐる喧嘩の當事者の姿は、周圍とは全く別世界のやうな妙な對照をなした。當事者と傍觀者とは、状態はちがひながら、喧嘩と云ふ雰圍氣としては同じ呼吸をしてゐるものだが、その呼吸が急に切れたのである。

踊り場は一坪か一坪半ほどで、上の方に窓がついており、他はコンクリの壁だが、その壁に兩人の體が諸共叩きついたり相手を擲りそこねた拳がぶち當つたり喉じめを喰つてそれを振りはなさうとして頭を叩きつけたりした。

周作は教科書と出席簿を片手にもつたまま、じつと立つて見てゐた。彌次馬連は、うつかりすると自分たちも傍杖を喰つて、この「閻魔」と云ふ仇名の教師から雷を落とされるかも知れぬと思はず居すくんだのだが、彼がじつと立つて眺めており、而も、その表情ににやりとした微笑が浮んでゐるのを見てとると、よしその微笑が薄氣味悪いものをふくんでゐるにしろ、教師の關心が自分たちを度外視して、ただ一重に鬭爭者にだけ注がれてゐるのだと安心した。そして、その心のゆるみから、緊張をといた體が少々動いたり、お互ひに目を見合せたり割合大

膽に周作の顔を見たりした。自分たちの危険が去ると、彼等は今度は「閻魔」がこの兩人の喧嘩に對して、どんな終止符を打つて見せるか、その打ち方に興味が湧いて來た。あの少々薄氣味悪いにやりとした微笑はそのやうな興味を起こさせるに充分だつたのである。

當事者たちは周作や彌次馬が目に入らぬは勿論、相手すら正確には見得ぬらしく、時々虚空を蹴つたり擲つたりした。いや、相手が見得ぬほど、烈しい喧嘩だと言へるだらう。虚空を擲つたり蹴つたりするところには、一種の滑稽さがあつたが、——事實、周作はその度になやみとした微笑を一層大きく擴げたが、——當事者にとつては、滑稽どころではないのである。

周作は、埃をまひ上げ羽をちぎりおとす軍鶏の喧嘩を連想しかけた。だが、軍鶏とも少々ちがふ、兎に角、人間ではない野生の獸ときり思へぬと考へてゐた。踊り場の上の窓からさし込んでる日光の中には、埃がまひ上つて見えたらうし、制服のボタンがとびちりどこかがさけてゐるに相違なかつた。彼がそんなことを考へてゐる中に、喧嘩の一人が、じつと自分たちを見てゐる「閻魔」に氣付いた。喧嘩相手は氣付かずに夢中になつてゐたが、何んともなく自分の敵手の舉動のかすかな變化から、彼も「閻魔」に氣付いた。

周作は兩人が氣付いたと解ると、急に夢からさめたやうになつて、にやりとした微笑を引込め、近づくとも兩人の肩をわし掴みにした。争闘者たちは、「閻魔」が凄い顔をして近づいたこと、自分たちの肩を驚掴みにしたこと、それをはつきり意識したが、今までの情勢で、急に止めることができなかった。いや、「閻魔」につかまつたからには、どうされるか解らぬと云ふ破れかぶれの氣持が手傳つて、反つて、烈しく摺り合ひ出した。そのために、周作の肩をつかんだ腕もふりもがれさうになり體も引きづられさうになつた。けれど、兩人の闘争者の意識の中には、はつきり「閻魔」のかげがさし込んで了つてゐるので、破れかぶれの行動もただ虚勢だけで、岩丈な周作の腕をふりもぐことにも、體を引きづるほどにもならず、何んとなく、自づと汗と埃と血のふき出た傷とで歪んだ顔を荒い息と一緒に見合ふだけになつた。

周作はその間、ただの一語も發しなかつた。大抵、「止める」とか「止せ」とか言ふものであるが、無言で押し通すのが彼の特徵だつた。無言が人に與へる無氣味さをよく知つてゐるのである。彼はそれを生徒たちから「音無しの構へ」と呼ばれてゐた。

周作はそこで兩腕に力をいれて、ぐいと兩方に引き分けた。兩人は、それでも僅かに思ひ切

りの悪い喧嘩のつゞきの恰好だけは試みたが、ただ恰好だけで、譯なくお互ひに手をはなして離れた。周作は若しも自分がこのまま居なくなつたら、再び喧嘩が起ると思ひ、同じ教師でも自分でなかつたら、こんなに僅かな手捌きだけで止まるものではないと考へて、悪い氣持がしなかつた。氣付いてみると、いつの間にか先刻の彌次馬が二倍にもなり階段の上下に犇めいてゐた。彼は心の中でにやにやした。いよいよ、止めの終止符をうつてみせる豫想からくるにやにや笑ひだつたのである。けれど、それはあくまで心の中だけのことで顔は薄氣味の悪いこわさをただよはしてゐた。

「どうしたのだ。お前たちは」初めて周作はこれも生徒に對する特徴の、底の深い、低い低い聲で言つた。低ければ低いほど、生徒にとつては無氣味だと云ふことを充分以上に心得てゐるのである。

すると、罪人が申し開きをする機會を與へられたやうに、兩人は自分の方が正しく、原因は相手にあると云ふことを堰を切つたかの如く一度に叫び始めた。

周作は暫らく言ふままにさせ、それから呼吸をはかつて、「馬鹿ッ！」と少々高い聲で、彼

等の辯解を一舉に拂ひのけるやうに怒鳴つた。兩人は横合から思ひがけぬ伏勢をうけたやうにびつくりして辯解から再び口喧嘩になりさうな叫聲をぴたりと止めた。

「喧嘩に何んの辯解がある。喧嘩は兩方が悪いから起るのだ」周作はこれを言ひながら、心の中で、「どうしたのだ、お前たちは」と理由を聞かれながら、それを述べたてると忽ち「喧嘩に何んの辯解がある」と逆にはねつけられる生徒こそ、いい面の皮だと考へ、何んもなく皮肉な快感を味つた。

彼は無言のまま手つきで自分の方に兩人を向き直らせ、更に兩手で兩人の肩がつき合ふやうにぐいと接近させた。それから、

「喧嘩は悪いことだと解つてゐるのだな。——覺悟はできてゐるな」と例の暗示の多い低い聲で言つた。

兩人は、その「覺悟はできてゐるな」と云ふ言葉で、びくりとしたやうだつた。その言葉が「閻魔」の口から漏れたとき何が自分の頬に觸れてくるか充分以上に知つてゐたからである。

その来るものを「速力を具へた重量」と呼んでゐる。

兩人は觀念して、じつと動かなかつた。周作は、自分の叱責の前に、生徒がこのやうに従順になることにも悠然たる快感を見出してゐた。

彼は兩人の顎の先を交互に下から撫ぜた。生徒は顎の先を靜かに撫ぜられたら、撫ぜられたと思つた次の瞬間に、まるで鷺が小鳥を襲ふやうな速かさで「速力を具へた重量」が頬に加はることを知つてゐる。彼等は今か今かと心臓がひきしまり息の止まるやうな氣持でじつと待つてゐた。この氣持を長くつゞけてゐたら、額に脂汗がにじみ出てき、本當に息が止まつて了ふに相違ない。

ところが、頬の打撃を待ちかまへてゐた兩人にとつては、思ひがけないことが起つた。と云ふのは、「閻魔」の手が自分の頭の片側にかかつたと思つた次の瞬間に、目から火花が散るやうな氣がした。そして、教師の手のかかつた反對側の頭が痛いツ！と思つたのは、もう一つの瞬間である。痛さがおくれてきたのである。教師が兩方の手を使つて、並んでゐる兩人の頭を鉢合せさせたのである。目から火花が散つたやうに思ひ、ひどく痛いやうに思つたけれどそれは餘りに今か今かと待構へてゐた氣持の反對のせいで、實は大して痛くもなかつたと、又

次の瞬間に兩人に解つた。

もうそのときには、見物人の間から、どつと云ふほどではないが、なんとなくそんな風に、笑聲が湧き起つた。深刻な瞬間が、思ひがけない教師の機智で轉換されたためである。生徒は教師の氣を見抜くことにかけては、小猿のやうな小猿さと素速さと愛嬌とをもつてゐるものである。「閻魔」が機智を働かして轉換させたそこには、もう生徒に對する叱責の感情が消えてユーモラスな氣持に明るんでゐることを察しとつた。その安心からも、笑聲が割合自由に彼等の口から飛び出したのである。

周作は事實、明るんだ愉快な氣持で、見物の生徒たちの笑聲の中を教員室に引揚げてきた。一人の方は、元來の痴鈍さから周作の氣持を充分讀みとれぬのか、くすんだ泣き面をしてゐたが、他の一人の鈴木と云ふ團栗眼の生徒の方は、鉢合せで痛い目にあわされながらも、鳥渡恥しそうに、又少々小猿るそうに下を向きながら微笑したのを周作は見とつてゐたので、それが一層氣持よかつた。當事者たちにも、自分の他意ない氣持が解つてと思つたからである。

彼は教員室に這入つて、自分の机の上に勢よくばたんと教科書を置くと、何んと云ふことなく、胸をそらすやうにして、ぐつと教員室の中を見廻した。けれど相變らずの風景であつた。

年をとつた教師は勿論、若い教師までが生活に疲れたやうな顔や、生徒に教へるのは結局、飯の種以外にはないのだと言つた事務的なカサカサ乾いた表情をして、殆んど、誰も彼も無言で、時々物憂そうに煙管で煙草をすつたりしてゐる。周作は今感じてゐた愉快な氣持などは忽ち消えて、彼等と同じやうに、物憂そうに、ドカリと椅子に腰を下ろして、机によりかかつた。ほんの先刻まで、例の「音無しの構へ」で彌次馬の生徒たちを壓しながら、じつと兩人の烈しい喧嘩を見て昂然としてゐた姿などは微塵もなくなつてゐた。

けれど、彼のその姿は、實は異とするに足りない。この頃の教員室に於ける彼は、いつもそんな風だと言つてよい。机の並んだ同僚とも餘り口をきかず、何かぼんやりして時々生欠伸をしたりした。教員室の眞中には粗末なテーブルとその上に枯れた葉がそのままついてる蘇鐵の小さい植木鉢があるが、その周りに立つたり腰かけたりして、暇をもてあました教師たちが世間話——それは重に新聞記事に現れた戦争の話や、金儲けの話などをするのであるが、一二年

までの周作は敢へてさう云ふものに反撥して仲間に加はらうとしなかつたが、この頃では、その傍を通りかかつて話の中に引きづり込まれると、自分の意見とちがつてゐても抗辯したり反對したりはせず、にやにや曖昧な笑ひをうかべて何んともなく肯いてるやうな肯いてゐないやうなどつちつかずの様子をするのだつた。本當に、一二年前までの彼は今の彼とは相當にへたたりがあつた。それかと言つて、世間話にあらはな反撥を示したり肩をつり上げた抗辯をするほど子供ではなかつたけれど、教員會議などでは自分の意見をまげやうとしなかつたばかりでなく、進んで自分の良しとすることは他の先輩の教員の意見を排して主張した。生徒を庇ふべきだと思つたときには、どんなにしても庇ひ通したり、又罪すべきだと思つた場合には、信賞必罪でなければならぬと呼號して、落第や退校も敢へて辭さなかつた。就職一二年、閱歴から言つて若輩に相違ない彼の行動を、生意氣と心中に思ふ同僚も多かつたに違ひない。周作は日常の交際では、目上は目上として立て、同輩に對しても謙遜であることを忘れまいとしたが、爲すべきとき言ふべきときには自分の信念をまげまいと心掛けてゐた。結局、教師としての仕事に熱情をもつてゐたわけであらう。大體、周作は根つからの教師志望ではない。それどころ

か小説家として一人前に飯が食へぬところから、生活の方便として、教卓に身をよりかからせてゐるだけである。それこそ、飯のためだけに教師をしてゐるのだ。さう云ふ立場であつてみれば、同僚の氣嫌を損じるほど熱心になる必要がどこにあらう。殊に從來の作家氣質から言へば、教師——殊に中學校の教師生活に輕侮を抱いてゐる。中學の教師になる者は飯の食へない才能の薄い男にきまつて居り、教師商賣によつて生活を潤沾させるよりも妻子と共に食ふや食はずに筆だけを握つてゐる方が立派であるとしてゐる。さう云ふ考へ方からすれば。中學のやんちや坊主どものために少しでも熱情を抱くなぞとは馬鹿の骨頂である。ところが周作は、それがよく解つて居り、うつかりするとそんな氣持に自分も成りかねないので、反つて、この下らぬ筈の教師生活——大きく言へば、中學生の教育に一種の熱情をもつことを努力したのだつた。文士は物を書くより他に何の能もない。物を書いてさへゐればよいのだ。それは周作には元より充分解ることであるが、文士なるが故に、自分の關係した仕事に、ただ小説以外のものだと言ふので、良い加減にしてよいと言ふことは有り得ない。文士なるが故に、そんな傲慢が許されてよいとは思へないのだ。彼には、氣質的に、そのやうな自分を甘やかした考へには蟲

酸が走るのだつた。「小説家面」「評論家面」といふは、彼には鼻持ちがならないのである。むしろ、彼は自分が文士の末席を汚がしてゐる身分であるがために、偶然關係したこの仕事の中に身を挺して行つたと言つてよいであらう。

小杉周作はその日の午後、郊外の自分の家に向つて歩いてゐた。正しくは新市内なのだが、家並みを一寸出ると、田や畠がつゞいて、昔からの藁屋根が杉の木立の蔭から見えたりしてゐるのである。彼は庭木の多い住宅地を歩いてゐるとき、前後の聯絡もなく、ふと今日の生徒の喧嘩を思ひ出した。と云ふよりも、何故自分はある風になに心の中に笑ひながら、――つまり、生徒の喧嘩を享樂してゐたのだらうかと云ふ風に考へついたのでつた。けれど、一分か二分考へてゐたやうだが、やがて忘れて了つた。そして家に戻つて夕食をすませ、かきかけの原稿をつゞけやうと二階の書齋の机の前に坐つて、暫らく考へてゐる中に、小説のつゞきは考へられずに、先刻、かへり途中で考へついたことが甦つてきた。ただ、甦つたのではなしに、今まで何故あゝ云ふ氣持になつたのだらうかと云ふことを考へつゞけてゐたみたいに、その一種の回答が浮んできたのである。

「これも、この頃の氣持のつゞきなのだ。變つた現れ方に過ぎないのだ」と心の中に呟いたのである。この一二年、自分の教員生活がつまらなく、退屈で仕方なくなつた。前のやうな情熱をもたうと努力してみても、それが出てこない。すつかり、だらけて了つたのである。そしてそれをいかにも理論づけるかのやうに、英語の年老いた教師が退職して行く直前に、

「教育なんて、いくらやつても人間を良くすることはできないよ」と言つた言葉が甦つてきたりした。周作は、その言葉を必しも、そのまま受けとりはしなかつたが、つまらなく退屈な氣持はどうにも仕様がなかつた。彼がこの一二年、前のやうに教員會議で自分の意見をあくまで主張したり生徒を庇つたり斷乎として罪したりすることがなくなり、物憂さうに机にじつとよりかかつてゐるやうになつたのは、このためであつた。この氣分は、教場でも現れないわけにはゆかつた。流石壇上にのぼると、時々生徒に對する愛情が強く息吹き出したり、彼等を自分の考への中に引き寄せやうとしたりする氣持が起り、それが言葉や行動になつて現れることもありはしたが、何んと言つても、自分の氣分に被ひかくすことはできなかつた。

「俺の文士氣質が露出したのかな。本性が出始めたのか」そんな風に考へて、情ない氣がする

こともあつた。

そのだらけた精神が、怠屈さをこまかす手段として、生徒の喧嘩に舌なめづりをして見てゐたのであらうと云ふのである。見てゐたばかりでなく、小さい闘争者たちが、今まで恐るべき「閻魔」にじつと見られてゐたと云ふことで衝撃を與へることに、又、つゞいて自分たちに加はる苛酷な運命の豫想で苦しめることに快樂を見出してゐたのである。而も、充分に豫想の痛苦さを味はした上、その豫想とは一變した解決で見物人をよろこばせ闘争者をびつくりさせ、そこに自己満足を得やうと云ふのである。全く蛇が蛙を弄ぶか猫が鼠を弄ぶ類ひのものである。

それにしても、一體、どうして、自分はそのやうにだらけた精神になつたのだらう。學校が退屈で馬鹿々々しく思へて仕方ないやうになつたのだらうと周作は考へてみた。三年も經つて教へることに教へる生徒にも感激がなくなるせいか、と思ひ返してみた。又、いくら一生懸命教へたところで、ボンクラ共は相變らずボンクラで、二年經つても三年經つても漢文の送り假名一つ満足につけられないのに、うんざりしたのかとも考へてみた。(周作は國漢の教師だつたのである)或ひは又、物憂そくに生氣のない顔でやつてきては、月給をもらふために教へ

るのだと云ふ風に何んの教へる感激もなしに教へて、再び物憂そうにかへつて行く同僚の気分の中にいつとなく引きづり込まれたのかと反省してみた。夫々が原因ともなり理由ともなつてゐると思へる。兎に角、夫婦生活にも四五年経つと倦怠期が来るやうに、自分の教師生活にも今同じものが來てゐるのかも知れない、この時期を踏み越せば、再び新しい生氣が自分の中に戻つてくるのかも知れぬ。

だが、周作は、そのとき、倦怠期と云ふ言葉の聯想から、ふと、自分の夫婦生活に思ひ及んだ。

「ああ、さうだ」と彼は小さく囁いた。今まで自分の教員生活と家庭生活とを別々にして考へてゐたが、自分の家庭生活の中にも、物憂い日々がづつとつづいてゐることに氣付いたのだ。いや、初めて氣付いたのではなく、以前から、家庭をしみじみ省みたことのない自分を知つてはゐたが、教員生活の倦怠と云ふことと結びつけて、家庭生活にも倦怠が來てゐるのに氣付いたのだつた。

「パパアー　パパアー！」と階段の下から二階を見上げて呼んでゐるらしい今年四歳の娘の聲が

した。周作は恰も聞えぬかの如く黙つてゐた。そして、腹の中で「こいつだ、うるさいのは」と苦々しく考へた。こいつと云ふのは、家庭のことである。そして、妻の里子が子供にあんな風に呼ばしてゐると思へて腹が立つのである。

「教員生活の物憂さ嫌らしさが家庭生活に泌み込んで行つたのだらうか。それとも家座生活の夫れが教員生活を物憂いものにさせたのだらうか」そんなこともちらと考へた。

その前の日は、どんなだつたらうか。大事件の起る前日らしい何かがなかつたらうか。雨が降つたらうか、お天気だつたらうか。周作の記憶では、それこそ何もない平凡な静かな一日で、そのために彼も何んの眠りをさまたげられることもなく、ふかぶかと熟睡した筈だつた。

その朝、いつものやうに登校の準備をするために、五時半か、もつと早くかに起きた。朝寢でその上その年生れたばかりの赤坊をかかへてる妻君の代りに、朝めしの瓦斯に火をつけたりなんとなくうろろしてから、ラジオにスキッチをいれた。せつかちな周作は朝のニュースを聞くなぞと云ふ心の餘裕はもつてゐないので、そのときも勿論、登校前にそれを聞いて行かう

と云ふのではない。阿佐谷驛の南口の小さい時計屋で買った柱時計は、値段ばかり高かつた。せに、時々狂ふので、ラジオによつて正確な時間を知るためだつた。スキッチをいれると殆んど同時に、或ひはすでにその前から放送を開始されてゐたのかも知れぬが、その途端に「只今重大放送がありますから、スキッチを切らずに置いて下さい」と云ふアナウンサーの聲が飛び出て來た。スキッチを入れると同時にこの聲がひゞいてきたのも、偶然だが、大體、その朝ラジオをかけたのも偶然と云ふ外はない。

周作は直ぐと、日米關係だと思つた。重慶政府との交戦はつゞいてゐたが、この二三ヶ月以來の日本人の關心は、むしろ、米國との交渉に集つてゐた。何ヶ月か前に、野村大將が大使として派遣されて交渉に當つてゐたのが、この二三ヶ月その交渉の波頭を烈しく高めてきたのである。近衛内閣は後退して、その内閣の陸軍大臣だつた東條中將が新しく總理の重責を背負つて前面に現れてきた。前のドイツ大使だつた栗栖が野村大使の補佐として、いかにもあわただしげに飛行機で彼の地に飛んで行つた。全く風雲急を告げてゐる感じである。けれど、交渉は依然として、思ふやうに動かない様子である。日本側では何んとか和平裡に解決しやうとして

可及的な譲歩をしてゐるものの、相手は頑として自分の建前を一步も譲らうとしない。そればかりか、何かその態度が思ひ上つて不遜を極めてゐる。長官は病氣として、交渉をのばしたり交渉の繼續をするかしないかもぼやかしたり、ルーズベルトは日本人全體が一喜一憂してゐるの交渉の眞最中に避寒地に悠々と出かけて、それを顧みない態度を見せたりした。實に、面憎い感じである。戦争にもなれつこになり國際關係の動きにも鈍感になつてゐた周作も、流石に時々思ひ出したやうに、このアメリカの態度に腹が立つた。

そんなわけで、周作に限らず、日本人は誰でも重大ニュースと告げられたとき、直ぐと日米間の問題だと思つたに相違ない。けれど、だらけた精神の怠屈な教員生活ですきれた彼は結局大したことではあるまい。そんな風にぼんやり考へただけだつた。

ところが、ラジオから

「今曉、×時×分、西太平洋に於いて米英と交戦状態に入れり」とつたわつてきた。丁度、二階にあがる階段の途中にゐて、彼はぎよつとして踏みとどまると、今度は踏みとどまつたままである自分に氣付いて、あわてて、ラジオのある階段下の簞簞の前にかけて下りて行つた。

周作は聞き終ると、急にはげしく駆け出したいやうな、又じつとこのこのまま氷つたやうにしてゐたいやうな、兩方の衝動を同時に感じた。一言にして被へば、「えらいことになつたぞッ」と云ふ氣持である。

併し實際には彼は駆け出すこともじつとしてゐることも出来ないから、いつものやうに辨當のはいつた黒靴をさげて何氣ない顔で勤めに出て行つた。けれど、心の中は「えらいことになつたぞッ！」のつゞきであつた。この衝動と冬の寒さと兩方で身を固張らせながら、森の中を通り風呂屋の側を抜けて驛に出、そこから電車にのつて人の肩にぶつかりながら吊皮にぶらさがつて學校のある驛に行く間に、「えらいことになつたぞッ！」が心の中でもみ合ひもつれ合ひしてゐる間に、はつきり二つのものに分れるのを感じた。元々、二つのものを感じてゐたのだがそれがはつきり意識的になつたのである。一つは、「よくやつた」と云ふ氣持である。そして「斷乎として、且たくみに敵の機先を制したものだ」と云ふ快哉を叫びたいやうな、事をなさんとして肉の躍るやうな氣持だつた。實際、ルーズベルトや國務長官の態度は面憎かつた。相手が面憎いだけに、そんな傲慢な態度をいつまでもとらせてゐる駐米外交團が齒痒くなつた。

なんとかして、和平裡に努力してゐる苦衷は、よく解るにしても、まるでふられても、捨られても、捨られても、その袖に泣きついてゐる未練男のやうなやり方に齒痒さを感じないではゐられなかつた。ヒットラーが、ソ聯に對して、斷乎開戦を宣した後だつただけに、一層齒痒さを感じた。「何故、そんなにまで膝を屈する必要があるのだらう。日本には斷乎たる處置をとるだけの備へがないと云ふのだらうか」そんな疑が涌かないこともなかつた。又、「結局は、日本はアメリカには何もできぬのだらう」とも思つた。そんな風な考へに搖すられてゐるだけに周作にはあの「西太平洋に於いて交戦状態に入れり」は身の固張るやうな驚きだつたし、「よくやつた」「敵機の先を制した」と云ふ快哉と腕の肉の鳴る氣持をうけたのである。けれど、もう一つは、一體、アメリカと開戦して大丈夫か」と云ふ心配だつた。もう三年越しの戦闘を重慶政府とつゞけており、又、いつソ聯との紛争が起るかも知れぬのに、今まで何等戦争で手傷を負つてゐない長大國アメリカと戦ふことの不安だつた。それは、この國を信じぬことから起る不安ではなく、この國を愛するがゆゑに起つたのである。周作は今まで取立てて母國を愛する感情を意識したことがあつたらうか。その感情に馴れ切つてゐたからである。だが、先刻

のニュースを聞いた瞬間から、この國の運命をはつたと胸に思ひ當り、その思ひ當ることは國を強く愛し出したからに相違なかつたのだ。

電車が走りつゞけるに従つて、その心配の方が強くなり、目的の驛に着く頃には、もう不安の心だけになつてゐた。

學校の中は何んもなく、ざわめいてゐた。お祭騒ぎのきやツきやと云ふ聲や走り廻り組打ちをしたりする騒々しさではないが、若い生命いのちがこの新しい國家の運命の展開に對して、じつとしてゐられぬと云つた様子である。あちらに一ト塊り、こちらに一ト塊り、いつもとちがつた呼吸を早めた話し方で話合ひ明るい表情を見せ合ひしてゐる。下級生たちは、お互ひの肩をついたり、體をたたき合つたりしてゐるのも、上級生が息を早めて話し合ふ氣持と同じものを體で現してゐるのであらう。

「先生ッ！」と云つて、遠くから走つてきて笑ひながら敬禮をする下級生があり、「閻魔」はこの新しい展開に對して、何を考へてゐるだらうと云ふ風に遠くから笑顔をして見せる上級生もある。

周作は、その中を、彼等の豫期に反したく、すんだ顔をして玄關に這入つて行つた。

教員室の中は、いつもの煎じ薬でもただよつてゐるやうなくすぼつた空氣が無くて、妙に教員たちは浮々としてゐるやうだつた。そればかりではない。冬だと云ふのに、窓々は開け放たれ、室の眞中の例のテーブルには理科室からもつてきたらしいラジオが据ゑつけられ、太い黒いコードが高い天井からおろされ、その長い餘計の部分が室の中にうねり廻つてゐる。ラジオの道具と一本のコード、それだけで、恰も機械だらけの工場のやうな相貌になつてゐる。そして、いつになく早く現れた、づんぐり肥つた校長が兩手をズボンのポケットに突込んでそり身になつて室の中を歩き廻つてゐるのだつた。

「お早うございます」と周作は、校長に聲をかけた。けれど、彼は耳に這入らぬらしく、ラジオの音を調節してゐる體操の教師と理科の教師の方に體をのめらし込んで行つて、

「まだ、うまくゆかぬか」と大きな聲を出したりした。そのラジオに擴聲器を取付けて、校庭にむらがつてゐる生徒たちに聞かせやうと云ふのである。

周作は外套をぬいで、自分の机の前に小さく腰かけてからこの荒々しい空氣に壓倒されたや

うに暫らく、じつとしてゐた。目をつむつてみた。それから、目をあけて改めて、室の中を、つと見廻してみた。成程、教師たちは、殆んど、自分の机にゐる者はなく、ラジオを直す同僚のところを集つたり、ストーブを取圍んで、景氣のいい聲で景氣のいい豫想を話し合つたりしてゐるが、よく見ると、同じくストーブを取圍んでゐてもラジオの近くに立つてゐても、同じ表情でないことに氣付いた。ある教師は黙つてゐた、ある教師は何か考へてるやうな顔をしてゐた。

周作はいつも一色に塗られてゐるやうに思へてゐた教員室だけに、少々不思議な氣持になりながら、再び改めて、夫々をじつと見た。

「事件にぶつかると、個性がはつきり出るものだな」周作は、そんなことを心の中に囁いた。そして、夫々の現れは、普段の人柄から考へ合せて、その推察通りのものもあり、逆なものもありした。ある教師は、若し彼の憂かぬ顔を見ただけで「非愛國者！」と決めてかかるだらうしある教師は目でだけ彼の氣持に肯きさうに思へた。

校長は授業をしたものかどうか一瞬迷ふやうだつたが、ラジオが重大な發表があるから、國

民は可及的聞くやうにと告げたので、授業はそれが完了するまでのばすことにした。相變らずラジオはうまく直らなかつた。低く消えるやうになつたり、かと思ふと、急に金切聲をあげたりした。幸か不幸か、重大發表は仲々なく、「愛國行進曲」や果ては流行歌がその高低曲折のぶちこわれラジオにのつて、教員室の前の校庭に薙めいてる生徒の耳にひびいて行くだけだつた。

「ハワイ海戦」が放送されたのは、八時半か九時だつたらうか。それも生徒の耳に充分聞きとれないほど低いものだつたので、紙に書いて貼り出したりした。

だが、幸運にも、嚴かな宣戰の大詔が東條首相の聲によつて放送され出したときには、ラジオはうまく直つてゐて、擴大された聲が廣い校庭の隅々までひびき渡つた。ラジオはすでに校庭の壇上に据ゑつけられてあつたし、生徒はその前に整列し、教師も生徒の側について靜かに頭をたれてゐた。

つゞいて、首相の「大詔を拜し奉りて」が放送された。首相の演説はうまいものではない。一句一句區切つて、それが聴衆に聞きとり易くもあつたが、そのために、平板になる傾きがあ

る。どうも、うまいと言へるものではない。けれど、聞いてゐる中に、うまいとか下手とか云ふことが問題でなくなつて了つた。演説のもつ内容が、ぢかに周作の心の中に躍り込んだ。眠つてゐたところを、鞭でしたたか叩かれたやうな氣がした。東條首相にたたかれたのではなく、首相の言葉を通して、アメリカ暴慢な態度に叩きつけられたやうな氣がしたのである。周作は反射的に全身で撥ね起きるやうな、怒りを發した。そこに、じつと立つてゐるに堪え切れないほどである。アメリカの態度は、日本と云ふ國家に對して、或ひは民族に對して叩きつけてきた鞭であるが、その鞭は直接個人としての彼が肩や脊中や頭にうけたのである。こんな風に、國家と個人の區別が絶した切迫感をうけたことは、初めてだつた。その瞬間、全く國家と個人の區別がなくなつてゐた。そして、こんなに國家のために個人的な憤激にまで高まらうとは、嘗つて彼が豫想もしないことだつた。

この不思議な心の動きは、後になつて、自分個人の生活意識が案外にも國家の運命と強く結びつけられてゐる、——と云ふよりも、一つのものではないかと云ふ感想を彼に抱かせる基になつた。この一二年の普通でない氣持は戦争と關係がないことではないと思ふのである。鬱々と

した日々も、又生徒の喧嘩を眺めてゐた自分も。

さて、その鞭の内容と云ふのは、アメリカの最後に提示した五原則である。「アメリカの支那に於ける利権は九ヶ國條約によつて、完全に保證すべきこと」「支那に於ける日本軍の完全撤退」「南京政府の否認」一體、これでは、日本が數多の血を流したと、多くの財貨を使消費したと、それがどうなると云ふのか。何んのために日本は尊い犠牲を拂つて、戦つてきたのか。日本は血みどろに戦ふだけ戦はされて、高見の見物の男から、何んの一顧すらなく場外に抛り出されるのと同じである。周作はアメリカを一個の人格として見てきた、或ひはあの文化を通して、一個の紳士としてすら考へて來た。だが、そのやうな曖昧な自分の信じ方に今こそ裏切られ、そのやうな信じ方をもつてゐた自分自身にも怒りを感じた。

周作は教員室に戻つてきてから、自分の机によりかかり、今のこの怒りがほんの衝動的な一時的なものであるか、本當に根のある怒りなのか、暫らく目をとちて考へてゐた。勿論、激動してゐる彼は、目をとちても、目の前がぐらぐら動いて、考へをまとめることはできなかつたけれど。

いつも、周作は生徒に話すとき、生なまのまま話してきかせることを避けた。必ず、手綱をひいた批判と解釋を論理的な方法を通して行ふことにした。重慶政府が悪いと言つても、ただ悪いで押しつけてみたところで、もう上級生の耳には本當の意味で這入らぬことは、自分の少年期青年期の經驗から解つてゐた。充分に解らせるためには、敵の美點すらあげてみせることを躊躇しなかつた。

だが、その日の四時間目に五年生の教室にのぞんだときには、彼は思はず生のままの感情を投げ出したのだつた。最初は自分の感情を牽制するために、いつもと變らず漢文の解釋をつづけたのだつたが、矢張り口を開かずにはゐられなかつたのである。

「君たちは、首相の演説をどう感じたか」と教科書を片手にしたまま、靜かに言つた。併し言葉をつくと、先刻の激情が直ぐ戻つてくるのを感じた。

「あの三原則を、屈辱の三原則を覚えてゐるか」と再び口を開き、それから顔の固張つてくるのを押へるやうに暫らく黙つてゐた。けれど、言はずにはゐられなくなり、

「男は恥しめられれば、死を以つてもそれを雪ぐものだ。まして、個人の恥しめではない、國

家の恥しめではないか」

周作は、そこで言葉を切つた。次から次へと、いくらでも、狂つたやうに言葉が出さうになり、それをじつと押さへつけた。

教室の中はしんと水をうつたやうに静まり反つた。この静けさは、逆に彼に一層烈しい衝動を起させるのだつた。

その日は、學校全體が落着いた授業ではなかつた。止むを得ないと言へば、止むを得ないことである。

周作は銀座にある同人雑誌の事務所に同人費を納める用事があつたので、授業をすますと、直ぐ學校を飛び出した。まだ日はかんかんあたつてゐた。彼はそれを物珍しさうにふり仰いだ。

學校の近くの神保町の停留所から市電にのらうとして、その近くまでくると、大學生や古本屋の番頭らしいのや若い會社員や——その附近には私立大學が多いので、大部分大學生であるが、それが長く長く行列をつくつて、町角の電柱の下の新開賣子の前につゞいてゐる。そして

買はぬ人までその賣子の周りを取圍んでゐる。これは、異常な風景だつた。

「ああ、さうだ」周作はそれを見ると、今日の大いなる日の記念に、二三種類新聞を買つておかうと思ひ當つた。だが、あの長蛇をなして行列につゞく氣にはなれない。すると、歩いてゐる直ぐ目の前に、薄汚れた着物をまとつた老婆が新聞を賣つており、而も、二三人の人が手をさしのべたり、勝手に自分で新聞を抜き出したりしてゐるきりである。

「どんなどころにも、穴はあいてゐるものだな。こりや今日の街の中の取りのこされた小さな穴だ」周作はあの買ひあせつてゐる長蛇の列と對照すると、微笑がこみ上げて來ないわけに行かなかつた。

周作はこの一寸したことがきつかけで心が靜かに落着くのを感じた。いや、もう前からあの亢奮は去つてある落着きができてゐたのだが、それを今はつきり意識したのである。

だが、その氣持で、改めて街を見廻してみると、全體がどこと言つて、いつもとちがつてはゐないのに氣付いた。成程、長蛇の列は、異常な風景には相違ないが、と言つて、列をつくつてゐる人々の顔に驚愕も焦りも見えはしないのである。彼が市電を數寄屋橋で下りて、あたりを

見廻したが、成程、朝日の階上の電光ニウスを仰ぎ見てる群集にはいつもより何んともなくざわざわした感じはあるけれど、ここにも取亂したところや妙な亢奮の色は見えなかつた。

けれど、この感想は直ぐと打破られるときがきた。

周作がいつものくせで銀座の表通りを避け、裏通りの廣い道を歩いて行くと、一町ほど行つたところの四ツ角の一つに小柄な洋服の老紳士の立つてゐるのが目に這入つた。いや、正しくは、一二間手前で氣付いたのである。それまで目に這入らなかつたのは、あたりの風物に没して了ふやうな靜かな存在だつたからである。そして、氣付いたと殆んど同時に、その老紳士がある文壇の老大家であると云ふことにも氣付いたのでつた。北國武士の血統を享けたその作家は、人に目立つやうな華かさは、どんな時代にもなかつたが、而もどんな時代にも没することなく、氣をつけて見ると、弱さうに見えながら實は何者も屈することのできない強い魂が居据つてゐるのに思ひ當るのである。丁度、今遠くから氣付かず、氣付いてみるとその靜かに立つてゐる姿が逆にあたりを壓してゐるのが解つてくるのと似てゐる。

その作家は何故、街角に立つてゐるのか周作には解らなかつた。誰かを待つてゐるやうでも

あつた。

「先生」會なぞで顔を合はせる程度の知合ひであつたが、周作は聲をかけた。

「ああ」と言つて、老作家は軽く帽子に手をかけて静かな表情で挨拶を返した。そして、いつもと少しも變らぬ澁い落着いた聲で「君は南へ行かなかつたの」と言つた。

「はア」周作は急に何んと云ふことなく身のひきしまる感じで、短かくそれだけ答へた。それより少し前、若い作家たちが報道班員として派遣されたことに聯關させて老作家は言つたのである。

周作は、老作家に、もう少し何か申上げたかつた。けれど、どうしたものか言葉が出ず、又出ないなら無理に出すことは反つて間違つてゐると思つて、そのまま叩頭するとそこを離れた。

彼が老作家の前に立つて、身がひきしまり聲が出なくなつたと殆んど同時に、思ひがけないものが自分の中に起つてゐたのである。けれどそれが何んであるか、はつきりその瞬間には解らなかつた。何か足早に歩いて足早に歩くことで自分をごまかすより仕方のないやうな氣持だつた。身がひきしまり聲が出なくなつたのは自分の中に起つたあるものと同時に起つたものでは

なく内部にあるものが起つたのでそのやうに身がひきしまり言葉が出なくなつたのであらう。

その内部に起つたものが、彼にはつきり解つてきたのは、それから續いて起つたある小さい事件の後だつた。それは、バスの中である。周作は銀座で用事をすますと、省線四谷驛から乗るため、尾張町四丁目から青バスで四谷見附に向つた。

その青年は數寄屋橋で乗り込んだのか、日比谷で乗り込んだのかはつきりしなかつたが、周作が氣附いたのは櫻田門を通りすぎてからだつた。前から騒々しく一人で怒鳴つてゐる聲がしてゐたが、人垣で解らず一群が櫻田門で下車したので彼の目に寫つたのである。

「大日本帝國萬歳！」その青年の亢奮したやうな、又思ひ上つたやうな聲である。

「皆さん、大日本帝國は強いすぞ！ 何者にも負けぬ我が神州。八州のくに。皆さん、大日本帝國は正義のために戦ふのですぞ」

その青年は皺になつた國民服を着て、首の細長い土色の顔をしてゐる。そして鈍感さうな目をむいて叫ぶのである。バスの乗客は誰一人文句もつけず、又、「大日本帝國萬歳！」と言つてゐるからには文句をつけるわけにもゆかず仕方なくだまつてゐるので彼は益々皆に聞かせて

やると云ふ風に圖に乗つて行くのだつた。そして本人は自分の聲や身振につられて本當に亢奮して行くらしくもあつた。

周作は最初、變な奴だぐらひに思つて聞き流してゐたが、次第に堪らなくなつた。

「日本軍はハワイを完全に占領したんですぞ。今頃は、日本の航空隊がアメリカの本土を爆撃してゐる。ニューヨークに火があがつてゐるのが見えるぢやないか」

周作はもう堪らなくなつた。日本の軍隊の尊い働きを自分の亢奮の餌にしてゐる。その態度が堪らなくなつたのである。若しも許されるなら、バスの中から突きおとしてやりたかつた。

併し、その男も日本人には相違ない、すると、こんな男がまだゐないとは限らぬし、これからも、戦勝に酔つて、こんないい氣に圖上せる青年があるかも知れぬと思つた。周作は直ぐと生徒たちを考へた。彼は本職は作家で教師は飯のたねだと思つてゐながら、矢張り、いつか教師になつてゐるためであらう。彼等から、こんな男を出してはいけぬ、そのために、明日授業に出たら、この醜い男を摘抉して示してやらうと考へるのだつた。

だが、その考は直ぐと自分自身の上に戻つてきた。今日の五年の教室で、亢奮しがちになり

ながら、生の感情のままで生徒に話したことが思ひ出され、何かこの男とえらぶところがないやうな気がした。だが、あれとこれとはちがふと思つた。では、どこがちがふと云ふのか、感情を處理できなかったことについては同じではないか。そして、その自責はかなり烈しくなつた。

先刻會つた老作家のことが、不意に心に甦つた。そして、あるとき老作家からショックをうけたのは、その老作家の深い深い落着きだつたと、その瞬間に、閃めくやうに解つた。彼は今日この日、而も直ぐ近くの新聞社の電光ユウスはきらきら光り動いてゐるのに、ただ一言も今日の日の大事件に觸れなかつた。ただ、周作に南に行かなかつたのかと訊いただけである。けれど、その老作家がこの大きな出來事を考へぬわけはない。考へて、而も、彼の強い諦觀の中にづつしり沈ませて動じないのだ。自分がその人の前に立つて急に身のひきしまり言葉が出なくなつたのは、彼の諦觀の光の前に自分の足元がよろめくを感じたからだと周作は思つた。

一體、あのづつしりとした強い諦觀はどうして出來上つたのであらう。智恵の光りか、長い年月風霜にさらされてきたへられた強い骨髓か。

周作は、自分のふらふら腰は今日ばかりではない、あの生徒の喧嘩を眺めてゐた心理も、又この一二年の怠屈な年月も、すべては、落着かぬ動揺してゐる自分の心から出てゐるのだと思つた。

周作はもうバスの中の青年を不快に思ふどころでなく、問題は自分自身にあると思つた。だが、その青年の不快が、恰も自分の影畫のやうに感じられたことも事實だつた。

彼は四谷見附で倉邊とバスから降りると、十字路を横切り、驛にだらだらと下つて行つた。驛の出札口で切符を買はふとして、小錢をつかんだ手を出すと同時に手を出した男があつた。づんぐり先の短かい指だが、彼の出した手を見ると直ぐと引込めた。引込められてみて、周作は自分の方が順番から言へば後だつたのではないかと思ひ、その男に濟まぬ氣がした。

丁度、ラッシュアワアの夕方なので、待つてゐた電車が止まると、まるで蟻でもたかるやうに扉口に一度に蟻集し、そこで押し合ひもみ合ひが始まつた。當然、這入れる廣さがありながら、もみ返されるために、逆にはねのけられて這入れず、這入るときには後からの力ではねとばされるやうにして中にのめり込むのである。周作は常々この醜狀を苦々しく思つてゐるのだ。

が、そのくせ、何かその場合の雰圍氣に突然つかまへられて、自分自身もいつか、その仲間になつて了ふのだつた。今もさうだつた。彼はもみ返されながら、ふとそのもみ合ふ塊の後に、ぽつんと一人立つてゐる男に目がとまつた。その男がさつきの出札口のづんぐり短かい指の男だつたのである。周作は、突然、自分の良心がつきとばされるのを感じた。

だが、卑怯な心から、つきとばされる良心に目を蔽つて、反つて一層もみ合ふやうにして無理に車内に這入り込んだ。どたどたと云つた風になだれ込んだのである。そして、勢のままに一ト塊が中の方まで這入つたので、反つて、扉口に僅かながら空間ができたほどである。後に立つてた短いづんぐり指の男はただ一人その空間にゆつくり這入つてきた。そして、ドアがしまつた。

周作は、それを見ぬふりをしながら、見てゐた。そのゆつたりした態度、それから、そのゆつたりした態度を充分うけ入れる空間のできた不思議さに感嘆に近い氣持を覺えた。少々誇張して言へば、こせこせした人間事ではなく、大らかな天地の運行をその中に見るやうな氣がしたのである。

電車が動き出してから、再びその男をみた。づんぐり指先に似合はしいづんぐりした體の、どこか酒屋の親爺と云つた五十前後の、特別とび抜けた顔もしてゐない普通の男だつた。だがその何んでもないやうな中に、實は何かがあるのではないか、長い年月をかけて世間の波の中と鍛へてきたものがあるのではないか。と周作は三度び見直した。だが、その男は相變らず、彼の存在などは全く氣付かぬらしくとぼけたやうな顔をして人々の肩の間にゆられている。

ふと、周三はあの老作家の姿を思ひ出した。何か通じてゐるものはありはせぬかと探る氣持にもなつてみた。

その指のづんぐり短い男は、彼の降りる筈の二つ手前の驛から降りた。周作はもう一度見納めに見ておかうと云ふ風に、人々の肩越しに見やつたが、もう見えなかつた。(一七・一)